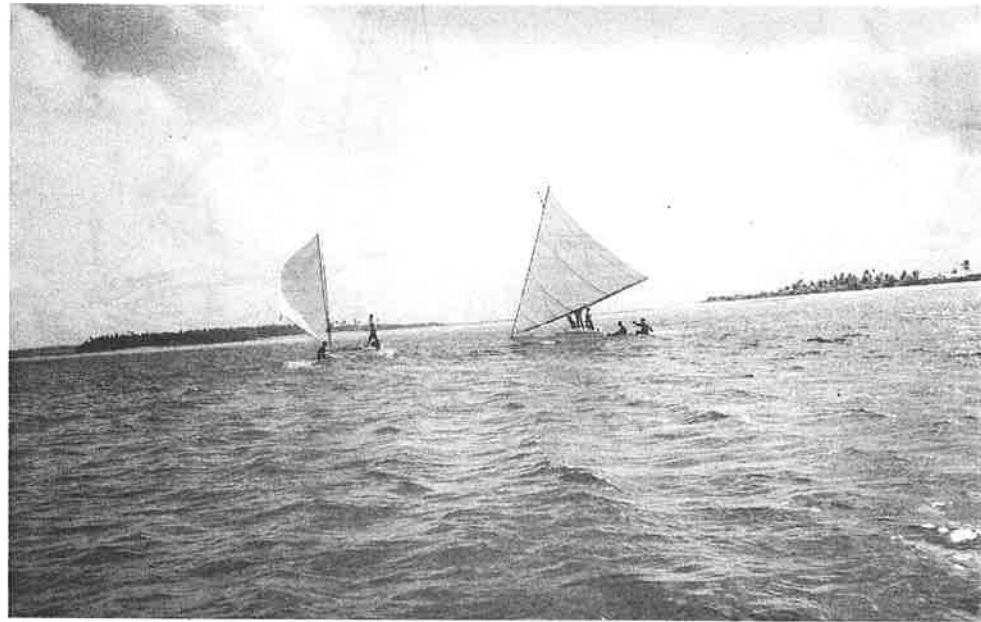


# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行  
財団法人第五福竜丸平和協会  
〒136-0081 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494



海洋民族であるマーシャルの人々は、マーシャルカヌーの高度な航海術をもっている。環礁の周りの波のパターンから地図を描き、進行方向の波をみるだけで現在地がわかる。(写真・文 竹峰誠一郎、本文4面)

NGOの多くはボランティア集団であっても、彼らはそれぞれ分野でエキスパートとして、プロ意識を持って質の高い仕事をしています。とくに、世界平和や国際協力の分野では政府機関以上に力を発揮できる場合があることを私たちに示してくれています。

一九五四年のビキニ水爆実験被災事件は、広範な国民各界各層を巻き込んだ原水爆禁止運動を誕生させました。この運動は、翌一九五五年には、当時まだ国交がなかった国を含め海外から多数の有力な人士を広島に集めた世界大会の開催へと導き、そこでは、国際的コンセンサスにもとづき原水爆禁止についての方向づけがなされ、行動計画が採択されま

## NGOの英知・ 地球市民の総力

川崎昭一郎

明けましておめでとございます。

一九九九年、いよいよ21世紀への助走に入りました。NGO(非政府組織)、NPO(非営利団体)の役割が日本でもようやくくみとめられるようになり、ここを活動の場に選ばうという有為な若者が出てきています。これは、何か新しい時代の胎動を感じさせてくれます。

NGOの多くはボランティア集団であっても、彼らはそれぞれ分野でエキスパートとして、プロ意識を持って質の高い仕事をしています。とくに、世界平和や国際協力の分野では政府機関以上に力を発揮できる場合があることを私たちに示してくれています。

一九五四年のビキニ水爆実験被災事件は、広範な国民各界各層を巻き込んだ原水爆禁止運動を誕生させました。この運動は、翌一九五五年には、当時まだ国交がなかった国を含め海外から多数の有力な人士を広島に集めた世界大会の開催へと導き、そこでは、国際的コンセンサスにもとづき原水爆禁止についての方向づけがなされ、行動計画が採択されま

## 太平洋の島の人々に 生きる力を教えられる

竹峰誠一郎

日本から東に目を向けたとき、多くの人が太平洋の海を飛び越え、先のアメリカ合衆国を覗いているのではない。しかし、太平洋を単なる空白の海として見続けていいのだろうか。

私は、昨年、太平洋のマーシャル諸島共和国と出会い、六月二十三日から七月二十三日まで、卒業論文『核実験の社会・文化的影響』マーシャルをフィールドワークして』執筆のため、単身マーシャルへ渡った。67回の核実験を受け、原水爆の雲の下に晒された五万六千人のマーシャルの人々の社会・文化はどう変わること余儀なくされているのだろうか。



アイルック島で

文化を知ることからはじめた。伝統的な暮らしが残るアイルック環礁アイルック島。五三〇人の人々は、突然の訪問にもかかわらず暖かく迎えてくれた。電気・ガス・水道は整備されていないが、人々は自然のものから自らの手で生活の糧をつくりだし暮らしている。たとえば椰子。栄養あるローカルフードとしてはもちろん、油は、髪や皮膚の手入れにも重宝する。葉からは、袋、敷物などが見事な手さばきでつくられる。皮からは、縄の繊維がつくられ、女性の労働であるハンドクラフトの材料となる。実は、乾燥させ刻んで『コブラ』がつくられ、お金を得ることができ。また、焚火の燃料や家畜の餌にもなる。まさに、椰子は「小さな太平洋の環礁における、暮らしの生命線」として欠かせない。

一度私は、アルジータ・ブングリックさんに、男の人の労働、マーシャルカヌーに乗せてもらう貴重な経験ができた。海の中で、楽しみとして、かつ暮らしを支えているものとして、巧みにカヌーを操る、その彼らの生き活きた輝い

た顔はとても印象的であった。彼らの姿に魅せられながら、ふと自分たち日本人が便利さの中、生きる力を奪われていることに気がつかされた。そして彼らから、生きる力を教えられた。

こうしたマーシャルの社会・文化の土台は、土地であり、その保身は、憲法でも基本的人権の柱として保障されている。しかし、ロンゲラップ島民は核実験でその土地が奪われている。

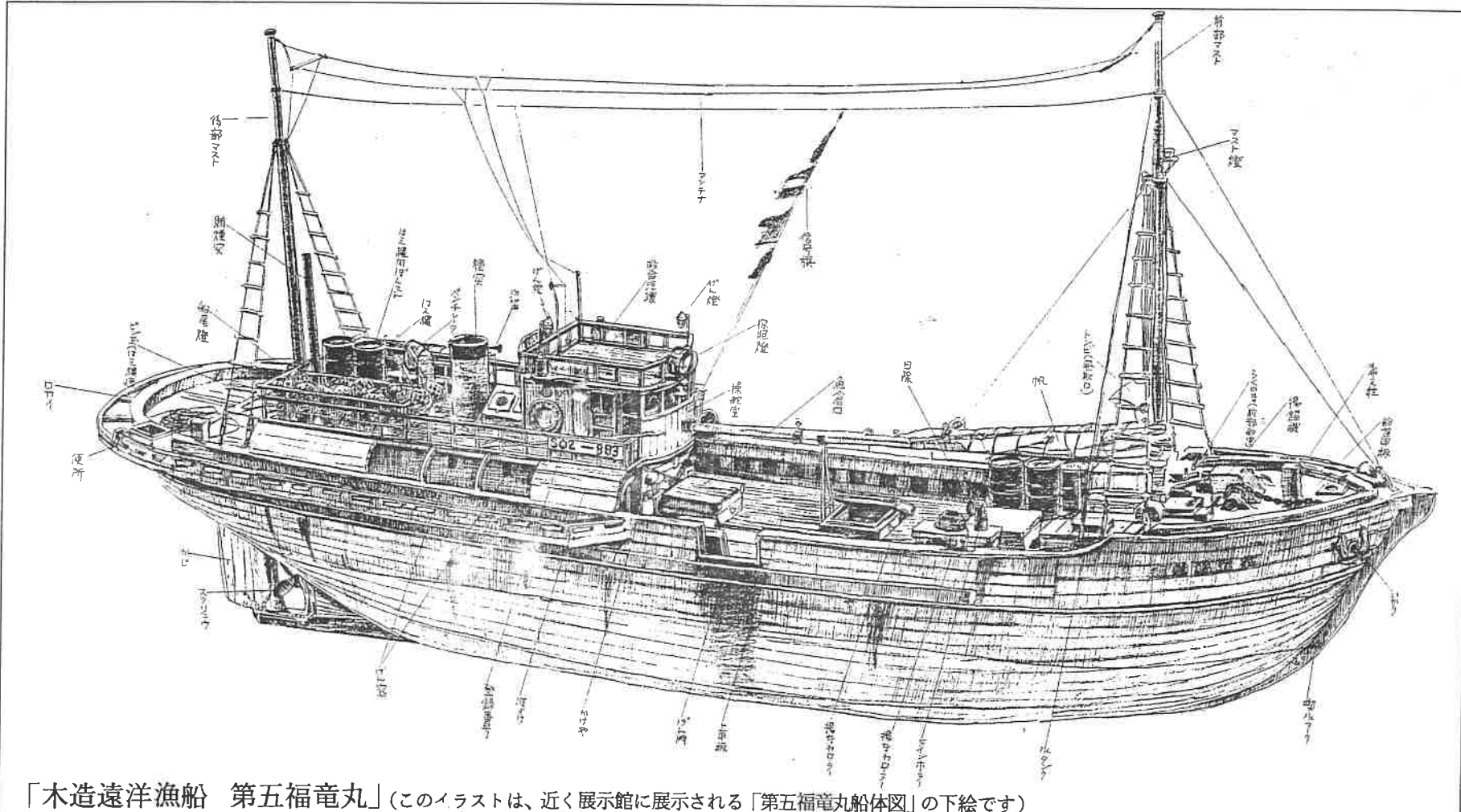
彼らが避難しているメジャット島から、イバイ島に向かう八時間の船『リイマンマン』号の船首には、ネルソン・アンジャインさんがじっと海を見つめ座っていた。彼は海が好きだという。その顔は力強く、海の男をほうふつさせるものだった。61の島々が連なるロンゲラップ環礁で、カヌーに乗り魚を漁っていた雄姿が私の脳裏にも浮かんで来た。しかし、いまロンゲラップ島民にとって、与えられているのはメジャットひとつだけで、他に行ける島はなく、海の男の力を発揮する場は奪われている。メジャットの海岸にはカヌーも見当たらない。生活の中心である椰子も少なく、女性のハンドクラフトの材料もない。アイルック

がら、核実験が労働・ローカルフードなどを奪い、自立して人間らしく生きることを根底から奪っていることがリアルに見えてきた。

核実験の影響は、ロンゲラップのみならずマーシャル全体に拡がっていた。先述のビキニ環礁から五百回離れているアイルックでも、一九五四年三・一にはその爆発音と光、爆風とともに、死の灰も降り四〇一人が被ばくしていた。アメリカの護衛駆逐艦がアイルックにも訪れて、避難も検討され、以後軍事的な調査も行なわれた。島民からは、環境の変化、子どもたちの被害、健康の被害を訴える声も聞いた。アメリカはついに一九九五年一月、大統領の諮問機関でアイルックを含むマーシャルの核被害の地理的拡がりを認めた。だが、未だに相当する補償が行なわれないまま、核実験の影響は、未曾有に拡がり続けている。

ブラボー実験から45年、マーシャル最後の核実験から41年たった一九九九年。いまも現在進行形で、太平洋の『楽園』とそこに暮らす人々の心を育みそのアイデンティティを形作る社会・文化は、むしろばみ続けられている。同時に私たちの課題も見えてくる。

(和光大学人間関係学部四年)



「木造遠洋漁船 第五福竜丸」(このイラストは、近く展示館に展示される「第五福竜丸船体図」の下絵です)

### 生活船 に自身の思いをはせる

高山 文孝

巨大なコッペパン。ぶあついヒノキや松材で編みあげたバスケット。海から陸へ上った今日でも、はちきれんばかりの丸みと茶褐色のナイスパディな美船、第五福竜丸。

日本各地にある船舶博物館で、この船ほど精美さを楽しませてくれるものは無い。大きくならず小さからずの木造・百四十トンが、肉眼で実物船をめぐる最適なポリウムなのだと思ふ。

たぶんそれは大海に出漁しマグロという美味なタンパク源を獲得してくれる「生活船」

という実直さに起因しているのかもしれない。——ところで、木造遠洋漁船の居住体感はいかなるものか? 二乗組員の大石又七さんにかがうと「波が船体に当たることに、ものすごいキシミ音を発し第五福竜丸がこっぴみじんに砕け散るような恐ろしさの連続」であったという。

海原の波頭と木造マグロ船が激突する恐怖の一瞬一瞬を無数に重ねて、ビキニ環礁の東百六十キロの海上でマグロはえなわ漁を操業中、アメリカの水爆実験による「死の灰」をかぶる。美船がかつて遭遇した残忍な核兵器。ものごとには今と過去があつて、二つの時代に自分自身の「思い」をはせることの大切さを第五福竜丸の実船はさししめしてくれる。(イラストレーター)

した。NGOという言葉こそ使われませんでした。国民の英知結集の模範例だったといえましよう。

第一回国連軍縮特別総会を意識して一九七七年に東京・広島・長崎をつないで開催された「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」では、NGOというコンセプトを正面に打ち出し、通称では「NGO被爆問題国際シンポジウム」と呼ばれました。事実、このシンポジウムはジュネーブNGO軍縮特別委員会の決定に基づき、ユネスコと世界保健機関から専門家の人選や財政等の面での援助を得て行われました。また、このシンポジウムで初めて「われらみなヒバクシャ」というフレーズが使われ、「ヒバクシャ」が国際語になりました。

私たち、夢の島の都立・第五福竜丸展示館の管理・運営に当たっている第五福竜丸平和協会は、財団法人というステータスを与えられていますが、大きくは、世界平和と原水爆禁止をめざすNGO活動の一翼を担っています。

では、第五福竜丸を冠した私たちの組織の特徴、アイデンティティは何でしょうか。原水爆禁止運動は五〇年の歴史をもちますが、そのなかで一九七六年に第五福竜丸展示館が設立されました。展示館設立後に、展示館が存在したからこそできたことについて考えてみましょう。

第五福竜丸の乗組員だった方々もやがて展示館に足を運ばれるようになりました。来館者同士の交流とふれあいを通じて、被害者としてはひたすら忘れないことであつたのを、もう黙ってはいられない、忘れ去られようとしていたビキニ事件を若い人たちにぜひ知ってほしいという気持ちになっていただけました。それが『死の灰を背負って』の出版やNHKスペシャル「又七の海」の放映につながったのです。被害者自ら語る言葉は重いものです。

マーシャル諸島からも被爆者を含め度々展示館に来られました。私どもが企画した展示館内での写真展「核にむしばまれるロンゲラップの人々」、「還らざる楽園・ビキニ」や、ビキニ事件四〇周年を記念したパネル討論での問題提起なども、現地の被害の実態やその大きさ・ひろがりによって多くの人々の目を向けてもらう上での一助になったのではないかと思います。核被害は日本から太平洋へ、さらに核強国米ロを含め全世界にひろがった問題であることが今日ではひろく認められています。

来館者に中学生、高校生が多いことは、展示館の未来にとっての希望です。「足もとから平和と青春を見つめよう」をモットーに核実験被災船を追った高知の高校生による調査活動は「ビキニの海は忘れない」と題する出版、映画にまで進みました。十代の若さと純粹さの素晴らしさを見せてくれました。

これらの事例に見られる、いわば「福竜丸らしさ」を今後も保持し、福竜丸ならではの形とやり方で平和への貢献を続けていきたいと思っています。

次の世紀においては、地球市民としての総力を一つにして核兵器の廃絶を達成しなければなりません。

私たちを21世紀へ導いてくれる船の羅針盤の針は今でも若者を向いて指しています。

私たちは、第五福竜丸展示館をこれから大切に、つねに新たな創造へのインセンティブが得られる場でありつづけるよう、努力するつもりです。

皆さまのご健康とご発展を心からお祈りいたします。

(第五福竜丸平和協会会長)